

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13565

研究課題名（和文）保育における幼児の「集団所属感」のアセスメントツール開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of a Assessment Tool for Young Children's Sense of Belonging in Day Nursery and Kindergartens.

研究代表者

名倉 一美（NAGURA, Kazumi）

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：80548222

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児期後期の4・5歳児が、自分をクラス集団の一員であると主観的に感じていることを「集団所属感」と定義し、その実態把握のために開発されたアセスメントツールの妥当性や信頼性を検証し、修正・改善を行うことで、ツールの実践での活用可能性を高めることが目的であった。研究全体を通して得られた成果は次の2点である。一つ目は、保護者アンケート調査を通して、幼児口頭質問用ツールの妥当性を検証し、実践での活用可能性を高めた点である。二つ目は、転入児へのアセスメント個別事例分析を通して、観察用ツールの項目修正を行うとともに、ツールによるアセスメントの課題点（個々の特性の影響）を明らかにした点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、保育者が幼児の「集団所属感」を把握する際の共通視点を用いたアセスメントツール項目について、その妥当性や信頼性の再検証および修正を行い、実践での活用可能性を高めた点である。このツールを用いることで、担任保育者のみでなく第三者による迅速で適切な実態把握が可能となり、クラス集団の中に居場所がないと感じている幼児の見落としを防ぐことができる。本研究のもう一つの意義は、ツールの課題点を明らかにした点にある。ツールで把握できるのは幼児の一側面であり、その結果のみで幼児の集団所属感を判断することはできない。実践で活用する際には、総合的なアセスメントが必要であることも明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study defines the "feeling of group belonging" as the subjective feeling in 4- and 5-year-old children that they are part of a class group in late childhood. It developed an assessment to understand the actual situation. The purpose of this study was to verify the validity and reliability of the tool and make modifications and improvements to increase the possibility of using the tool in practice. Two results were obtained through this study. First, through a parent questionnaire survey, we verified the validity of the tool for verbally testing young children and increased its potential for practical use. Second, through the analysis of individual cases of assessing transferred children, we revised the items in the observation tool and clarified the issues (influence of individual characteristics) in the assessment.

研究分野：保育学 集団保育実践研究

キーワード：所属感 アセスメント 居場所 集団保育実践 幼児期後期

1. 研究開始当初の背景

保育施設に通う幼児にとって、そこに自分の居場所があると感じているかどうかは、情緒の安定に大きな影響を与える。幼児が安心して園生活を送れるように、保育者が幼児個々の居場所感を迅速かつ適切に把握できれば、不安定な幼児を見逃さず、必要な対応を行うことが可能となる。

保育施設における幼児の居場所感は、幼児期前半と後半とで影響対象が異なる。幼児期前半の居場所感は、主に保育者とのアタッチメント形成が土台となるのに対し、幼児期後半の居場所感は、友だちとの関わりが増加する時期であるため、保育者との関係に限定されず、一緒に集団生活を送る友だち関係から受ける影響が大きくなる。そこで、本研究では、幼児期後期の子どもが、自分の所属する集団に抱く主観的な居場所感に注目し、R.F.Baumeister & M.R. Leary (1995) の「所属 (belong)」の概念を用いて、「集団所属感」と定義した。R.F.Baumeister らは、人間の根本的な欲求として「所属: belong」があると述べており、誰もが定期的で継続的な社会的相互作用を必要とし、それが欠如すると、心身の健康に長期的な悪影響を及ぼし、行動的および心理的問題を引き起こす可能性がある」と主張している。保育者が幼児の「集団所属感」が適切に把握し必要な援助を行うことは、幼児の心身の健康を守ることにもつながっている。

これまで研究代表者は、保育者の迅速かつ適切な幼児の「集団所属感」把握を可能にする手段の一つとして、保育者が捉える幼児の「集団所属感」の共通視点を言語化し、それを用いたアセスメントツールの開発に着手してきた。本研究の開始以前に、2種類のツール(幼児口頭質問用と保育者観察用)の開発を行った。しかし、これらツールの妥当性や信頼性の検証の積み上げが足りず、実践での活用には至っていない状況であった。本研究は、この幼児の「集団所属感」アセスメントツール開発の継続研究に当たる。

2. 研究の目的

本研究は、幼児期後期4・5歳児の「集団所属感」の実態把握を目的として開発された2つのアセスメントツールについて、その妥当性や信頼性を再検証するとともに、実践で活用するにあたっての配慮点を明らかにし、アセスメントツールの有用性を検討することが目的であった。

3. 研究の方法

調査1: 「幼児への口頭質問アセスメントツール」の妥当性検証を行うため、インターネットによる保護者アンケート調査(外部委託)を実施した。質問項目は、ツールを用いたアセスメントの実施(保護者による5歳児への口頭質問)、保護者からみた幼児の実態に関する質問、保護者による担任保育者に関する質問である。質問と回答の相関、と回答の相関を分析し、妥当性を検証した。

調査2: 「保育者の観察アセスメントツール」の信頼性や有用性を検証するため、ある5歳児転入児の事例分析を行った。具体的に行った方法は、保育者によるツールを用いた幼児の観察アセスメントの実施、保護者によるツールを用いた幼児への口頭質問アセスメントの実施、保育者が観察用ツールを使用した際の気づきについての自由記述、保護者へのインタビュー調査である。これら4つの調査によって得られたデータから総合的に分析を行った。

4. 研究成果

(1) アセスメントツール回答結果と保護者へのアンケート調査結果との相関

アセスメントツール(保護者による5歳児への口頭質問)の回答と、幼児の実態に関する保護者の回答との相関を分析した結果が表1である。

表1 集団所属感と保護者評価の関連 (Spearmanの相関) n=448

|          |                             | 幼児の実態に関する保護者の回答 |             |              |                 |               |            |
|----------|-----------------------------|-----------------|-------------|--------------|-----------------|---------------|------------|
|          |                             | 合計              | 1. 楽しく通っている | 2. 気の合う友達がいる | 3. 好きなことができています | 4. クラスの雰囲気が良い | 5. 登園泣きはない |
| 幼児の集団所属感 | 合計                          | 0.299**         | 0.310**     | 0.175**      | 0.256**         | 0.263**       | 0.229**    |
|          | 1. 集団への信頼感                  | 0.074           | 0.091       | -0.009       | 0.064           | 0.067         | 0.062      |
|          | 2. 集団への好意<br>(3つの質問回答の複合配点) | 0.301**         | 0.310**     | 0.206**      | 0.254**         | 0.245**       | 0.236**    |
|          | 3. 具体的な集団活動                 | 0.229**         | 0.229**     | 0.151**      | 0.203**         | 0.204**       | 0.167**    |

数値は Spearman の相関係数 ( ) \*\* : p<0.01

幼児の集団所属感アセスメントツールの回答のうち、合計得点および質問カテゴリー「2. 集団への好意」「3. 具体的な活動」については、複数の項目において幼児の実態に関する保護者の回答との相関がみられ、アセスメントツールの妥当性が示された。しかし、「1. 集団信頼感」の

回答のみいずれの保護者回答とも相関がみられなかった。この質問項目の位置づけは今後の検討課題である。

続いて、保護者の担任保育者に関する質問回答と、幼児の集団所属感との相関分析を行った。保護者による担任保育者に関する質問は、3つのカテゴリー（養護の働き 信頼感 子ども同士をつなぐ働き）を設定し、各カテゴリー別にアセスメントツール（保護者による5歳児への口頭質問）の結果合計点との関連を調べた。その結果、3つのカテゴリーの合計点と、集団所属感アセスメントツール結果合計点とで、いずれも弱い正の相関がみられた。しかし、項目別の相関を分析したところ、幼児の集団所属感との相関がみられなかった項目の方が多く、また、相関のみられた項目でも強い相関は示されなかった。幼児の集団所属感、保育者の特定の関わり方に限定されて高められるものではないことが想定され、単純な保育者評価と相関を検証することは困難であることも示された。

## （2）転入児の集団所属感アセスメントの事例分析

途中転入児を対象に、保育者に「観察用集団所属感アセスメントツール」実際に使用してもらい、対象児の実態の変化過程との関連から、ツールの有効性検証の調査結果分析を行った。保育者のアセスメント結果と、保護者へのインタビュー調査結果、対象児の口頭アセスメントツールの回答結果との関連から総合的な検証を行った結果、ツール7項目のうち「他児模倣」「気の合う特定の友達」「友達との名前呼び合い」「一人での探索行動」はツール同様の変化がみられ、ツールの信頼性が示された。一方で、「同じ興味を持つ友達との遊び」「保育者との関わり」「友達とのトラブル」は、個人差や環境の影響からツールとは異なる姿がみられた。その結果を踏まえ、アセスメントツール項目の修正を行った（表2）。

表2 観察による幼児の集団所属感アセスメントツール（修正版）

| 集団所属感の変化    |                  | 1. 集団所属感なし                              | 2. 集団所属感獲得の前段階                | 3. 集団所属感獲得                                 |
|-------------|------------------|---|-------------------------------|--|
| 他者との関わり項目   |                  |   |                               |  |
| クラスの友達との関わり | 1. 他児模倣          | 1. 距離を取りながら他児の模倣をする                     |                               | 3. 直接クラスの子と関わりながら模倣をする                     |
|             | 2. 気の合う特定の友達     | 1. 気の合う特定のクラスの子はいない                     | 2. 気の合う 特定のクラスの子ができる          | 3. 気の合う特定の他児以外の複数のクラスの子とも関わる               |
|             | 3. 同じ興味を持つ友達との遊び | 1. 一人遊び中心                               | 2. 保育者を仲介に同じ興味を持ったクラスの子と一緒に遊ぶ | 3. 保育者がいなくても同じ興味を持ったクラスの子と遊ぶ               |
|             | 4. 友達との名前呼び合い    | 1. 誰の名前も呼ばない                            | 2. 特定の気の合うクラスの子と名前を呼び合う       | 3. 気の合う特定のクラスの子以外のクラスの子とも名前を呼び合う           |
|             | 5. 友達への自己主張      | 1. クラスの子に対して消極的（他児とのトラブルを避ける、トラブルをみている） |                               | 3. クラスの子に自分の気持ちを出す（トラブルが増えることもある）          |
| 6. 保育者との関わり |                  | 1. 特定の保育者にのみ関わりを求める                     | 2. 保育者を仲介にクラスの子と一緒に遊ぶ         | 3. 保育者がいなくてもクラスの子と一緒に遊ぶ                    |
| 7. 一人での探索行動 |                  | 1. 周りを気にしながら一人であちこち移動                   | 2. 遊ぶ相手を探して一人で移動              | 3. 一人での長時間移動はなくなる（気の合うクラスの子や好きな遊びを探すために移動） |

\* アンダーラインが修正箇所

なお、本調査を通して、保育者の自由記述や保護者インタビュー結果から、ツールによるアセスメントでは把握困難な個人的特性の影響も明らかとなった。「所属感」とは幼児の主観によるものであり、個々の特性や前後の文脈によって変化しており、対象児の「集団所属感」に影響を与えた理由も多岐にわたっていた（例えば給食の影響など）。開発したアセスメントツールは、保育者と幼児の関係や、幼児同士の関係といった限定された視点からの実態把握であり、「集団所属感」の一側面の把握にとどまる。この点から、ツールを用いたアセスメントの限界も示された。実際に幼児の集団所属感を把握する際には、個人差を踏まえた多面的・総合的な視点からのアセスメントが必要である。

## （3）研究全体を通して得られた成果

研究全体を通して得られた成果は次の2点である。一つ目は、保護者アンケート調査を実施し、回答結果との相関から幼児口頭質問用ツールの妥当性を検証したことで、研究開始以前のツールと比較して、実践での活用可能性を高めた点である。二つ目は、転入児を対象としたアセスメントの個別事例分析を通して、観察用ツールの項目修正を行うとともに、ツール使用時の課題点・配慮点を明らかにした点である。

本調査の検証結果から、保育実践において、自分の居場所がないと感じている幼児がいなくどうかを把握するため、開発された幼児の集団所属感アセスメントツールの活用は有効であることが示唆された。しかし、ツールに頼ったアセスメントは、幼児の限定的な一側面のみの実態把握であるため、ツールの結果で判断するのではなく、幼児の日々の様子を長期的かつ多面的な視点から観察し、総合的に分析することが必要であることも示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>名倉 一美   | 4. 巻<br>8             |
| 2. 論文標題<br>保育における幼児の「居場所感」の概念整理の試み：「Belong（所属）」の概念に着目して | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>佐賀大学教育学部研究論文集                                 | 6. 最初と最後の頁<br>117～127 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.34551/0002000174          | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）                   | 国際共著<br>-             |

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>名倉 一美   | 4. 巻<br>7           |
| 2. 論文標題<br>幼児の集団所属感アセスメントツールの有用性の検証：5歳児転入児がクラス集団へ抱く所属感の変化過程分析から | 5. 発行年<br>2023年     |
| 3. 雑誌名<br>保育者養成教育研究   | 6. 最初と最後の頁<br>25～35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                   | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                          | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>名倉一美                        |
| 2. 発表標題<br>5歳児の集団所属感と保護者による担任保育者評価との関連 |
| 3. 学会等名<br>日本保育学会第75回大会                |
| 4. 発表年<br>2022年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>名倉一美   |
| 2. 発表標題<br>保育における5歳児「集団所属感」アセスメントツールの妥当性の検討 保護者評価との関連から |
| 3. 学会等名<br>日本保育者養成教育学会                                  |
| 4. 発表年<br>2022年   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

以下の「所属感」に関する学会自主シンポジウム、ラウンドテーブルに話題提供者として登壇した。

- ・日本保育学会第74回大会自主シンポジウム（2021）「我が国の保育実践における所属感（Sense of Belonging）概念の適用可能性」 話題：「所属感」の視点から多文化保育を捉える
- ・日本発達心理学会第35回大会会員企画ラウンドテーブル（2024）「保育・教育現場における所属感（sense of belonging）の実相」 話題：多文化共生保育における幼児の所属感

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|